
仮面ライダージャスティス

キーショット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダージャステイス

【Nコード】

N0306Y

【作者名】

キーショット

【あらすじ】

完全オリジナル作品の仮面ライダー「ジャステイス」。人はベルトを手にとるとそれをどう使うのか？

強大な悪に立ち向かい人々の平和を守るのか？また、その力で人々を支配するのか？そんな物語です。

キャッチコピーは「変身。」

*ときどきシナリオ修正がありますが、あしからず。

主人公&ライダー紹介

主人公&ライダー紹介

・久保 武ノ^{くぼ たけし}仮面ライダージャステイス

19歳。本作品の主人公。茶色と黒の混じった髪で、基本赤色のTシャツに黒のジャンパーを着ている。

口が少々悪いが、親切な青年。悪者には容赦せず、少々行き過ぎた鉄槌を下すことがある。

基本的に自分から突っかかりはしないが、人が襲われていたり相手から突っかかってくると容赦はしない。職業は上流階級専門の料理人である。そのため金持ち。口癖は「馬鹿かお前は。」

・仮面ライダージャステイス

オレンジと黒のツートンカラーの仮面ライダー。複眼は白色であり、モチーフはトカゲ。トカゲといってもアマゾンのような荒々しさはない。

戦う環境によってその環境に適したフォームにチェンジすることができる。（その環境だけしか使えないわけでもない）

・ジャステイスフォーム集

・ガイアフォーム

基本形態。市街地などで使用し、主に肉弾戦で戦う。必殺技は「ガイアライダーキック」。足に周囲の物質を引き寄せ、固める。それを相手に叩きつける技。固まった物質は技の終了後元に戻る。

・ジャステイスドライバー

ベルトをイメージすると、自動的に装着される。「変身」の音声

コードで装着者を変身させる。真中に「適応石」という鉱物が埋め込まれており、それによって装着者を変身させることができ、フォームによって色が変わる。ベルトの右側にチェックメイトボタンというものが付いており、押すことで電子音声が流れて必殺技の体制へと入る。

・適応剣ジャスティスブレード

ジャスティスの腕からオレンジと黒の光が剣をかたどって出現する剣。主にガイアフォームの時に使用する。鐔のところに丸いくぼみがありそこにベルトの適応石をセットしてチェックメイトボタンを押すことで必殺技を発動する。必殺技は「ガイアライダースラッシュ」。刀身に周囲の物質を引き寄せ、固めて刀身を巨大化させる。そして、そのまま振り下ろす技。固まった物質は技の終了後元に戻る。

主人公&ライダー紹介（後書き）

初めて小説を書いてみたんですけどいかなものでしょうかね（笑）
がんばって連載を続けたいのでよろしくお願いします

第1話 HENSIN（前書き）

この作品をトライRさん、そして読者の方へと捧げます。

第1話 H E N S I N

ドカアアアアアアン！ドゴオオオオオオオオオオオオ！

崩れる大地、落ちる大空、割れる海。まさに世界の崩壊。その破壊活動を行っているのは、異形の怪物たち。怪物たちは戦っているやつらもいれば、仲間を引き連れて周辺の建物を破壊しているやつらもいる。

『グアアアアアアア！』

力尽きて倒れた怪物がいた。怪物の体がどんどん変化していき、なんと人間になった。そして腰に巻かれていたベルトが砕け散った。人間がベルトの力で怪物になっていたのであった。その地獄のような光景を見ていた少女がいた。そしてつぶやく・・・

ジャスティス
「正義・・・」

「痛ったあああああああああああ！」

頭をぶつ叩かれた少女がいた。その名は水面^{みなも} 灯^{あかり}。

「明日は東大の入試だというのに爆睡とはずいぶんと余裕だな水面！」

怒鳴るのは『天道ゼミ』の講師 宇都宮^{うつのみや} 拓龍丸^{たくりゅうまる}である。

あ、そっか私まだゼミにいたんだっけ。

当然のごとく拓龍丸にこってりしぼられた灯は1時間後にやっとゼミから解放されて、友人の佐久間^{さくま} 水穂^{みずほ}と帰るのであった。

「馬鹿だなあ灯は。あしたなんだよ！？あんた入試大丈夫なの！？」

「もちコース！オツケーだよ！絶対受かるからだいじょーぶだって
！」

「はあ、まあいいや。じゃ明日ねー」

水穂は疲れた様子でアパートへとはいつて行った。

あの夢はなんだったんだろう……。今思ってみれば何の夢なのか
見当がつかない。

「まあ、いつか。明日に備えて眠ろつと」

そう言つて灯は夢の中へと落ちていくのであつた……

翌日

「やっぱり入試って緊張するな〜。」

灯は東大入試の試験会場で緊張を感じつてぶるつとした。

「適度の緊張は大切だしな〜。まあ、いざ受験戦争参戦するぞ！」

そう呟いて校門をくぐろうとすると正面に試験官らしき男が立ちふ
さがつた。

「あの、どいてもらえませんかね。」

灯がそういつても無反応だ。

「あのー聞いてますか？」

試験官らしき男はゆっくりとこっちを見てにやりとすると、腰辺りに手をかざした。何かと思って見てみると急にベルトが現れ男に装着された。

「変身。」

そうつぶやくと男の体が変化し、蝶の怪物へと変貌した。当然悲鳴をあげる灯。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

周りの人たちも怪物の出現に驚いてパニック状態になり、もう入試どころではない。

蝶の怪物にぶたれ、はたかれ、首を絞められながら持ち上げられる灯。

このまま死んじゃうのかな・・・意識が遠のいていく中ではつきりと聞こえた声があった。

「変身。」

聞き違いかと思った瞬間、オレンジと黒のツートンカラーのバイクに乗った怪物・・・いや、どっちかというと怪物まではいかないような者が蝶の怪物に体当たりをし、怪物が吹き飛んだ。

「ラ、ライダー。」

灯はなぜかそうつぶやいてしまった。

『お、お前もジェネシスか！？なぜこんなことをする！』

蝶の怪人はライダーに問いかける。すると、

『一緒にすんなよザコチョウが。どうしようとおれの勝手だろ。』

『ふざけたやつだ。今すぐ消えれば命は助けてやるぞ。』

『お前が消えたほうが早いと思うんだけどなあ。』

ライダーは余裕の態度で蝶の怪物を挑発する。その光景を見ていた灯はあぜんとしていた。

『なんだと！殺してやる！もう止まらないもんね！』

『やってみ。』

蝶の怪人は腰に装着しているベルトの中心にある石のような物から色鮮やかな扇子のような武器を取り出し、ライダーに襲いかかっていく。

『オラアアア！』

スパアアアアアアア！

蝶の怪人がライダーの胸を切りつけた。そのあとも連続で切り込んでゆく。

『ハハハハハ！死ねよおらあ！ハハハハハ！』

ライダーは身動きもせず斬撃を受け続けている。すると、ライダーが蝶の怪物に問いかけた。

『そろそろお前、ぶっ飛ばしてもいいか？』

『はあ？状況わかってんのかお前？お前は今なすすべもなく斬りつけられてるんだぞ？そんな野郎がどうやって俺をぶっ飛ばすんだよ！？』

蝶の怪物の指摘通りダメージの効いてきたライダーは徐々にひざまずいてきてるのであった。

『そろそろ首もらっぜえ！あばよ、ぽつと出ジエネシス！』

蝶の怪物はそういつと扇子の武器をライダーの首めがけて振りかぶった。

「危ない！」

灯は目をふさいだ。

スパアアアアアアアアン！

何かが吹き飛ぶ音。灯はなにが吹き飛んだかは大体察しが付いていた。すると、蝶の怪物が叫ぶ。

『な、なんだとー！』

その声に驚き灯は、目を恐る恐る開いてみた。するとなんとそこには、扇子はライダーと怪物のはるか50メートルくらい先に転がっているではないか。

ライダーの体制からみておそらく蹴りあげて吹き飛ばしたのである。
う。

『おいザコチヨウお前って馬鹿だな。』

ライダーが挑発する。

『なんだと!?!』

『お前は本当に馬鹿だ。なんで俺が演技をしていたとは思わないんだ?』

『「!?!」』

蝶の怪物と灯は同時に驚いた。あのすさまじい斬撃の中でそんな余裕があったのかと。

『そろそろ決めるとするか。』

ライダーがベルトに手を伸ばしベルトの右にあるボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのアスファルトがライダーの右足に纏われ、固まっていく。

『なんだ、それは!?!そんなボタン俺のベルトにはないぞ!?!』

よく見てみると、蝶の怪物のベルトとライダーのベルトはところどころ違っていた。

『お前とは格が違っんだよ。』

ライダーはもう一度腰のボタンに手を伸ばし、ボタンを押した。

【goodby】

電子音声が響き渡り、猛スピードでライダーが蝶の怪人の懷へと入り込む。

『ガイアライダーキック。』

ライダーはそう呟いた瞬間アスファルトを纏った右足を蝶の怪人のあごに蹴りこみ、空中へとぶっ飛ばす。

『ぐあああああああああああ！』

蝶の怪人のベルトが碎かれ、試験官の男の姿となり地面に落ちて気絶した。

『あばよ、ぽつと出ジエネシス。』

T o b e c o n t i n u e d . . .

第1話 HENSIN（後書き）

どうでしたでしょうか。初めてだったのでどんな感じかは知りませんが、主人公を1話目に出さないというのは仮面ライダーアギトに似せたつもりなんですけど、微妙だったかな（笑）
次回もお楽しみに！まあ楽しんだかはしらんけどね

第2話 HENSINSYA（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「絶対受かるからだいじょうぶだって！」

「変身。」

『なんだと殺してやる！もう止まらないもんね！』

『ガイアライダーキック。』

『あばよ、ぽつと出ジエネシス。』

第2話 HENSINSYA

『あばよ、ぽつと出ジエネシス。』

ライダーはそう言うと、自分のベルトを外し、変身を解除した。どうやら20歳くらいの男性のようだ。

男はそのままバイクにまたがろうとする。灯はあわてて男に近づいて行った。

「えっと、私水面 灯といいます。あの、助けてくれてありがとうございます!」

灯はとりあえずお礼をいった。男の正体がなんなのかはそのあとだ。

「あの、お名前は何と言うんですか?」

「森 伸吾。」

男は森 伸吾というらしい。

「伸吾さんですね!」

「嘘だ。」

「へ?」

なんなのだ?この男は?

「本名は久保^{くほ} 武^{たけし}っていうんだ。もういいか？」

「武さん、もういいかってどういう・・・」

「だから帰っていいかって聞いてんだよ！」

と、武は怒鳴った。一瞬ひるんだ灯だが、負けてはいない。

「あの、武さんあなたは何者なんですか？どうして怪人になったりしてたんですか？」

「お前ジェネシスを知らねえのか？この非常識が！」

「!？」

普通の人がなぜ知っているのかが逆に聞きたいところだ。すると、

「まあいい、俺の家に来い。お前の知りたいこと全部教えてやるよ。仮にもジェネシスに襲われたんだしな。」

好奇心から灯は、行くことにした。

く 武の家

「す、すごい・・・」

灯は言葉を失った。灯の目の前には超豪華な豪邸があったのだ。まあ、豪華だから豪邸というんだけれど。

「さっさと入れよ。」

そう言って武は豪邸へとはいってゆく。

「あ、待つてくださいよ。」

灯は武の後を追って豪邸へはいって行った。

豪邸の中はまるで博物館のようだった。史上最強の恐竜のティラノサウルスの化石や、カブトムシを始めとする昆虫の標本、何千冊と並べられた本など、ある物をいえばきりがない。

「見とれてないでさっさと来い。」

武はそういうと1つの部屋へとはいって行き、灯もそのあとを追う。

その部屋はそこは応接室のような場所だった。武は紅茶をいれ、灯と向かい合ってソファに座った。

「で、何が聞きたい？」

「あのーまず最初に聞きたいのが、あの怪人はなんだったんですか？」

灯は蝶の怪人はなんなのか質問をした。

「あれは、破壊を創る者達『ジエネシス』だ。個体によって違うが、基本は『ジエネシスドライバー』であの姿に変身する。」

「あの、私が見たときはベルトが急に巻かれていたんですが・・・」

「あれは、秘密結社『メイキング』の超瞬間転送システムによるものだ。」

秘密結社メイキング？そう灯が聞き返すと武は説明をした。

「秘密結社『メイキング』というのはジェネシスのサポーターのよ
うなもので、ジェネシスドライバーを製造、販売もしている。超瞬
間転送システムというのは、使用者が手をかざすだけでベルトを転
送するシステム。つまり、いつでも好きな時にベルトを装着し変身
できるわけだ。」

「じゃあ、あなたもジェネシス？」

武は首を横に振った。

「俺のベルトはメイキングの作ったものじゃない。まあだれが作っ
たかは置いておき、おれはジェネシス達からさっきお前を守ったよ
うにジェネシスの悪事を未然に防ぐ、またはベルトの破壊を行って
いる。」

なるほど。だから蝶の怪人も武のベルトは見たことがないと言った
わけだ。

「他に知りたいことは？」

「えっと・・・」

ビーツ、ビーツ、ビーツ

灯が質問をしようとしたとき、突然警報が鳴った。

「ジェネシスカ・・・いくぞ光！」

「灯です！」

そう突っ込みながら二人は豪邸を後にする。

く公園

そこでは蝶の怪人が子供たちや大人を襲っていた。

「お前は・・・」

武は首をかしげる。蝶の怪人はさっき倒したはずだ。

『さっきはやってくれたなあ・・・でも残念だったな！おれはベルトを二本持っていたんだよ！』

「え、1人何本も持つてるんですか！？」

灯は武に尋ねる。武は、

「知らん！とにかく倒す！」

武が手をかざすと、腰にジャスティスドライバーが装着された。手をクロスし、ある言葉を叫ぶ。

「変身！」

すると、ベルトからオレンジと黒の光が武に巻きついていき眩い光

を放ってライダーに変身した。

『俺はこの姿を仮面ライダーと呼んでいる。』

「仮面ライダー・・・」

武と灯が話していると、蝶の怪人が扇形の剣を2本持って斬りかかってきた。

『下がってろ。』

武はそう言っていると灯を遠くへ突き飛ばした。

ドスン！

「痛ったあー！女性には優しくなさいよ！」

灯の文句を無視して仮面ライダーは蝶の怪人の攻撃から身を守る。

『今回は手加減なしだぜ。なんせ2回目だからな。』

そう言って蝶の怪人の腹を蹴りつけた。

『こっちのセリフだ！すぐに殺してやるよ！』

ガッ！、スパアアン！、ドスッ！

仮面ライダーは蝶の怪人の斬撃を手で防ぎながら腹に蹴りを入れていってる。

『決めるぜ。』

【CHECK & charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのアスファルトが仮面ライダーの右足に纏われ、固まっていく。

『そんなの食らうかよ!』

そついうと蝶の怪人は背中の中4枚の羽を広げて空中へと飛び上がった。

『お前のその必殺技は上空へ蹴りあげる技だろ!?!なら空中にいとけば当たらねえんだよ!』

灯は確かにそつだと思った。空中にいる状態だとキックが当たらないではないか。すると

『ハハハハハ、本当に馬鹿だなお前は!』

『何だと?』

どういうことだろう? 灯はそう思った。

『さっきも言っただろ「手加減なし」ってな。見てな、すぐに潰してやるよ。』

『できるわけねえだろ! ハッターがましてんじゃねえよ!』

仮面ライダーはベルトの右側のボタンをもう一度押した。

【goodby】

電子音声が響き渡ると仮面ライダーは猛スピードでダッシュした。

『馬鹿が！当たらねえて言っただ・・・』

すると仮面ライダーは飛び上がった。

『なに・・・！』

あのダッシュは助走だったのか！蝶の怪人と灯がそう思った時にはもう遅かった。

『ガイアライダーキック。』

そう呟くとジャンプキックで蝶の怪人をぶっ飛ばした。

『ぐぎやあああああああああ！』

ベルトが碎け散り、試験管の男に戻って男は公園の砂場に落下して気絶した。

「やりましたね！武さん！」

灯は武に駆け寄ったが、なぜか武は無視してベルトを外した。

く 武の応接室

「あの、私武さんの助手になってもいいでしょうか？」

「!？」

武は意味がわからなかった。助手といったってこんな女性を戦いに参加させてもよいものなのだろうか？と。

「お前の場合邪魔にはなっても役に立ちそうだとは思えないんだけどな。」

「なっ、そんなことはありませんよ！きっとなんか役に立つことがある……はずです。」

灯は自信なさげに答えた。

「でもまあいい。ただし、給料は働かないと出さないからな。大方俺の豪邸を見てコバンザメのようにおこぼれにありつきたいだけだろうっ？」

「違いますー！……というか思いついたんですけど、仮面ライダーの名前思いついたんですけどいいですか？」

「なんだ？言ってみる。」

灯は深呼吸して口を開いた。

「ジャスティス。仮面ライダージャスティスというのはどうでしょう？」

「ジャスティス正義か……いい名前だ。そうしよう。」

第2話 HENSINSYA（後書き）

やっと書ききりました！いろいろと変な部分は少しずつ直していきますので、ぜひ次回も御覧ください！ありがとうございました！

第3話 TEPPOUO（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「本名は久保^{くほ} 武^{たけし}っていうんだ。もういいか？」

『俺はこの姿を仮面ライダーと呼んでいる。』

「あの、私武さんの助手になってもいいでしょうか？」

「ジャスティス。仮面ライダージャスティスというのはどうでしょう？」

第3話 TEPPOUO

とあるショッピングモール

「あ、あんたはいつたい何者なんだよ!？」

ショッピングモールの地下で髪を染めた高校生ぐらいの男たちがふるえながら後ずさり、中には腰を抜かした者もいる。

『我らは、メイキング。破壊を創る者、ジェネシスの支援団体だ。』

メイキングと名のつた者はチョウチンアンコウの怪物だった。

『力を与えよう。その力を存分に引き出し、利用しろ!』

怪物はそう言うのと、男の1人に1本のベルトを投げつけた。

「メ、メイキングさんよお。こ、これ、どどどどうやってっ、使うんだよ?」

男はふるえながら尋ねた。

『ベルトを装着しろ。力を手にすることができる。』

怪物はそう言うのと、発光して消えた。

そこに残っていたのはおびえて無様な格好の男たちと1本のベルトであった・・・

く武の豪邸

「武さ〜ん・・・」

灯がどんよりした声で武を呼ぶ。

「なんだ？どうしたそんな変な顔して。」

「普通の顔です！私不安なんです。」

どうやら灯には何か悩み事があるようだ。

「なにが不安なんだ？」

「これからの生活ですよ。」

「なに？」

灯が不安というのはこういうことだった。住み込みで助手をしているとはいえ、同じ屋根の下で男女2人というのはまずいのではないかと、武がいつ何をしでかすか分からない。と

「馬鹿かお前は。大丈夫だ。お前みたいなブスを襲うぐらいなら、まだバツタと結婚したほうがまだ。」

「！！！！！」

怒りが頂点に達しがみがみと怒りをぶちまける灯であった。ちなみに灯はどちらかというと美人の部類に入るほうである。

「そついえば武さんって、なんの仕事をしているんですか？まさか

ジエネシス狩りで金がもらえるとは思えませんし・・・」

「ジエネシス狩りとか変なこと言うなよ。おれの仕事は泥棒だ。」

「本当ですか！通報しなくちゃ！」

そついうと灯は携帯を取り出す。

「嘘だ。」

「もう、なんですか！嘘ばかりついてー！」

「うるさいな。俺の仕事はコックだ。」

「またまた！嘘は2度も通じませんよ？」

「いや、本当だって。」

「じゃあ証拠を見せてください！」

「いいだろう。」

武はそつ言つと1階のキッチンへと向かっていった。

くキッチン

キッチンにはあらゆる調理に必要なものがそろっていた。包丁がずらーつと500本くらいあり、巨大な冷蔵庫もあった。巨大な水槽もあり、その中では様々な魚やエビたちが食われるとも知らずに泳ぎまわっていた。

「ぼちぼち作るか・・・」

そついうと武は料理を始めた。

30分後・・・

「できたぞ。」

そついうとテーブルにパスタをもってきた。

「へえ、すごいですねえ！ではいただきます！」

そついつて灯は一口食べた。すると・・・

「お、おいしい！」

「当たり前だろ。どうだこれで分かったか？」

灯は口にパスタをほう張りながらうなずいた。

「おれは時々王族の飯を作ってやって金をもらってるんだ。だからこんな家に住んでるんだよ。」

「すごいですねえ！」

灯は感心する。

「この家はお礼としてもらったんだ。他にも別荘が100はあるな。」

「100! どんだけすごいんですか!」

「だからいったろ。」

そうため息をつくとき、灯のパスタ1本を手で食べた。

「ふう、じゃあ行くか。」

武はそう言いつと出かける支度を始めた。

「え、どこに行くんですか?」

「決まってるだろ。お前の服を買いに行くんだよ。」

「え! なんですか!?」

灯は驚きと疑問が混ざった感情となっていた。なぜ武が私の服を買ってくれるのだろうか。

「はあ、馬鹿かお前は。そんなダサい格好で俺の助手をするつもりか?」

確かに今の灯の服装は水玉のワンピースであり、それは『オシャレ』とは言えない感じのものだった。

「余計なお世話です!」

「とにかく行くぞ。それとも俺が適当なの選んで買ってくるか?」

5分後二人はショッピングモールへと向かうのであった。

「ショッピングモール」

「わあ〜！可愛い服がたくさんありますね！」

灯は目を輝かせてショーウィンドウにはりついていた。

すると、高校生ぐらいの男子グループが灯のところへ近寄ってきた。

「お、可愛いね〜！どう？俺たちと一緒に遊んで行かない？」

「ベタだな・・・」

武と灯は思わずそう呟いてしまった。もちろん灯は断る。

「え・・・すみません！結構です！」

灯が断ると男子グループの中の一人が中心に立ち、あとの男子は離れていく。

「へえ〜俺たちの誘いを断るんだ・・・じゃあいいや！」

そう言うと、男子の腹にジェネシスドライバーが装着された。

「た、武さん！」

灯が武を呼んだ瞬間、

「変身！」

男子はそう叫ぶと、テッポウウオジェネシスに変身した。

「下がってる。」

武は灯にそういうとジャスティスドライバーを装着した。

「変身。」

ジャスティスドライバーからオレンジと黒の光が武に巻きついて、仮面ライダージャスティスへと変身した。

『いくぜえ！殺してでも俺の誘いには乗ってもらっぜ！』

『馬鹿かお前は。先に俺がお前を潰してやるよ。』

ジャスティスがそう言うのと、テッポウウオジェネシスは腰にセットされた魚型の銃を構えた。

『くらえ！』

テッポウウオジェネシスが叫んだ瞬間、銃から高圧水流が発射され、ジャスティスに炸裂し、ジャスティスが2階から1階へと落ちていった。

テッポウウオジェネシスが後を追って飛び降りる。

「武さん！」

『っ！痛えな。これは速攻で潰させてもらっぜ。』

『やってみやがれ！』

2発目の高圧水流が発射されるがジャスティスはそれを避けてテッポウオージェネシスを蹴りつけた。
だが、テッポウオージェネシスは持ちこたえて、ジャスティスの首をつかみ上げて腹に銃を突きつけた。

『終わりだぜ。』

『お前がな』

そう言うジャスティスは素早くベルトの右のボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡り、ライダーの周りのタイルが仮面ライダーの右足に纏われ、固まっていき、すぐさま右のボタンを押した。

【goodby】

電子音声が流れた瞬間テッポウオージェネシスは銃の引き金を引いたが遅かった。

『ガイアライダーキック。』

ジャスティスはテッポウオージェネシスの銃を持っている手にガイアライダーキックを蹴りこんだ。
テッポウオージェネシスは横へ吹っ飛んだが、ベルトは碎けなかった。

『あぶねえな。いったん引き揚げるか。』

テッポウオージェネシスはそう言つとガラスを突き破つてショッピングモールから逃げ出した。

『逃がすかよ。』

ジャスティスはそう言つたが、その場で倒れ、変身が解除された。

「武さん！大丈夫ですか！？」

「ああ、大丈夫だ。最初の高圧水流が効いたが・・・まあいい。おい、初仕事に俺を家へ連れて行け。」

「なんでこれを初仕事に数えるんですか・・・」

つつこんだ後灯は武に肩を貸し、タクシーを呼んだ。

くとある裏通り

「はっはははは！すげえぞこの力！」

先ほどの男子が大声をあげて笑っている。

「おい、この力で俺になんか影響はないんだよね？」

男子が問いかけた先にチョウチンアンコウの怪物がいた。

『ああ、お前には何の影響も起きない。ただ、強いて言うなら・・・』

』

「？なんだよ何かあるのか？」

『その力に溺れるということだ。』

その言葉は男子の心に響いた。

「じゃあ俺には関係ないな！」

と、自分をごまかすように答えた。男子はチョウチンアンコウの怪物に疑問を思っていたことを聞いた。

「そういえば、あんたのベルトは俺のベルトとは違うな。特別製？」

『これは、ある組織が作っていたドライバーでな。このドライバーにこれをセットすることで変身することができる。』

そういつて金色の細長い『ある物』を男子に見せた。

「へえ、そうなんだ。なあ、あんたも人間だろ？正体見せてくれな
いかな？」

『いいだろう。お前と私の仲だ。といつても昨日知り合っただけ
だがな。』

そういつてチョウチンアンコウの怪人はドライバーから『ある物』
を取り出して変身を解除した。
すると、20代後半ぐらいの銀髪のオールバックの男性へと変化した。

「お、意外と若いね！」

「まあな。話もここまでしておこう。さあ、もっと破壊を創造しろ！」

「言われなくてもやってやるよ！」

そう言う男子は表通りへと走り出したのであった・・・

T o b e c o n t i n u e d . . .

第3話 TEPPOUUO（後書き）

ふう、なんとか仮面ライダー風の終わり方ができたかと思っています。
『ある物』はいずれ明らかにしていきたいと思います。
ではまた！

第4話 RI・TINOSA（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

『力を与えよう。その力を存分に引き出し、利用しろ！』

「おれは時々王族の飯を作ってやって金をもらってるんだ。だからこんな家に住んでるんだよ。」

『いくぜえ！殺してでも俺の誘いには乗ってもらっぜえ！』

『その力に溺れるということだ。』

「言われなくてもやってやるよ！」

第4話 R I - T I N O S A

ドサッ！武がソファに倒れる。

「ハア、ハア、これはかなり効いてるな。」

「武さんは寝てパワー回復しといてください！相手にだってダメージがあるのは一緒なんですから。」

「ああ、そうだな。少し寝かせてもらう。」

そう言う武は毛布をかぶり、数分後には寝息が聞こえてきた。

「とにかく今は武さんに回復してもらってっと。私は私の仕事をしなくちゃ！」

そういうと灯は部屋へこもっていった。

くアパート

「はあ、灯はどこ行っちゃったんだろう？試験会場に怪物が出てから1度も見てないなあ・・・もしかして誘拐でもされたかなあ？」

そう呟くのは水穂であった。

灯は試験会場での1件後水穂の前に姿を現していないのである。

「あ、もうこんな時間！いけないいけない夕飯買いに行かなくちゃな。」

そう言つと水穂は近所のスーパーへと向かうのであった。

く武の豪邸

「できたー！」

灯はそう叫ぶと部屋から飛び出した。
当然その大声で起きない者はいない。

「うるせー！もう少しぐらい眠らせるよ！」

武は灯に怒鳴つたのだがすかさず言い返される。

「5時間も寝れば十分じゃないですか！もう6時ですよ！？」

「ん・・・まあな・・・」

「それより具合はどうですか？」

「ああ、いい感じた。」

灯はほつとした。まああれだけ寝て回復しなかったら困るのだが。

武はふと疑問に思ったことがあった。灯の手にタブレットのようなものがあつたのだ。

「おい、灯。お前の持っているそれなんだ？」

「あ、これですか？これは今さっき完成した、簡単にいえばジェネシス図鑑です！」

「ジェネシス図鑑だと？」

武はそう尋ねると灯は満面の笑みで説明し始めた。

「これにはビデオカメラが接続されていてですね、これでジェネシスを撮影・記録をします。次にその情報をネットワークから集めて図鑑の完成というわけです！」

「へえ、すごいな！？よくそんなすごい作れたな！？」

武は素直に驚いた。

「それでも東大に受かる実力はありますからね！」

「いや、関係ないだろ・・・」

武が突っ込むと警報が鳴った。

「ちょうどいいですね！この図鑑を試してみましようか！」

「不幸を喜ぶなよ。」

そういうと2人はバイクで走りだした。

くあるスーパー

キャ-----！ワ-----

-----！

様々な悲鳴が飛び交う。そこにいたのは水穂であった。

「ど、どうしたの！？何があったの！」

状況の飲み込めない水穂の前に1人の男が現れた。そう、あの高校生ぐらいの男子だ。

「お、君かわいいーね！どう？俺と遊びにいかね？」

「ベタだな・・・。」

水穂は灯や武と同じことを呟いた。

「結構です・・・っていうかなんでみんな逃げてるの！？」

「へー俺の誘い断るんだ。じゃあいいや、死ね。」

「死ね！？」

水穂はわけがわからない。すると男子の腰にベルトが装着された。

「変身。」

そう言う男子がテッポウオジェネシスへと変身した。

「キャーーーーーーー！！」

水穂は悲鳴を上げて失神した。

『おいおい、倒れてるよこいつ・・・まあいいや！じゃあバイバー・

・・
』

とどめを刺そうとした瞬間テッポウウオジェネシスはぶっ飛ばされた。

『痛つてえな！なんだよ！？』

「俺だよ。」

そこには武と灯がいた。

「み、水穂！？」

倒れている水穂を見つけた灯りは急いで駆け寄った。

「友達か？」

「は、はい。同じゼミでした。」

「そうか。じゃあそいつと一緒に下がってろ。」

武の腰にベルトが装着され、武は両手をクロスさせる。

「変身。」

オレンジと黒の光が武に巻きつき仮面ライダージャスティスに変身した。

『さっさと潰すか。』

『ハハハハ！お前は俺に1度負けてんだぞ！？できるかよ！』

そういつた瞬間腰の銃をとり、高圧水流を発射した。
ジャステイスはなんとかギリギリでよけた。

『危なえな！』

『お前まだ分からねえのか！？お前俺とではリーチが違いすぎるんだよ！』

確かにその通りである。このままではジャステイスは近づけない。

『はあ、あんまり武器は使いたくねえんだけどな。』

『なに？』

すると、ジャステイスの腕からオレンジと黒の光が剣の形をかたどり出し、実体化した。

『これが俺の武器だ。こっからが本番だぜ。』

そう言うと、高圧水流をよけながら、テッポウウオジェネシスに――太刀入れた。

スパアアアアン！

『痛！くらえ！』

テッポウウオジェネシスはジャステイスに高圧水流を命中させ、ジャステイスを吹っ飛ばした。

『残念だったな。この勝負勝敗を分けたのはリーチの差だぜ。終わりだ!』

そういつて再び銃を構える。

そのときジャスティスはベルトの対応石を剣の空洞にはめ込んだ。続けてベルトの右のボタンを押す。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡ると、アスファルトが剣の刀身に固まっていき、どンドン剣が巨大化していく。

『な、なんだと!?!』

『確かにお前の言うとおり勝敗を分けたのはリーチの差だな。』

そういうとベルトの右のボタンをもう一度押す。

【goodby】

電子音声が響き、ジャスティスが構える。

テッポウオジェネシスが引き金を引こうとするが、一瞬ジャスティスが早かった。

『ガイアライダースラッシュ。』

そう呟くと一気に剣を振りおろし、テッポウオジェネシスを斬り裂いた。

『グアアアアアアア！』

ジエネシスドライバーが粉々に砕け散った。

「やりましたね！武さん！」

『ああ、そうだな』

一件落着かと思いきや、チヨウチンアンコウの怪物がジャステイスを突き飛ばし、ジャステイスは壁に激突した。

『なんだお前は！？』

がれきをどかしながらジャステイスは問いかけた。

『お前ごときが知る必要はない。』

そう言いながら、襲いかかってきた。

『チツ、本当に何なんだよ！？』

ジャステイスは剣を構えて、応戦した。

スパアアアン！キイイイイイイン！ドガ！

すさまじい格闘戦が繰り広げられるが、先ほどの戦いで疲労しているジャステイスが少しおされぎみだった。

ジャステイスがチヨウチンアンコウの怪人の腹を蹴り飛ばして距離をとった。その時ジャステイスはふと疑問に思った。

『お前のベルトなんか違うな・・・？』

『ああ、特別製なんだな。』

『いや、明らかに俺や他のジェネシスとはモデルが違っぞ・・・？
お前、本当に何者だ？』

『うるさいぞ。』

そう言つとチヨウチンアンコウの怪人が猛スピードで灯のもとへと走ってゆく。

『なんだと！？』

『フン。』

おそらく人質に取るつもりだろう。だが

ドオオオオオオオオン！

ミサイルらしきものがチヨウチンアンコウの怪物に直撃し、ぶっ飛び。

『・・・なに？』

すぐに起き上がって誰の仕業が確かめるが、ジャスティスや灯たち以外誰もいない。

『チツ。』

チヨウチンアンコウの怪人は軽く舌打ちすると、体を超発光させその周りにいた者全員の目をくらまし、姿を消した。

『何だっただんだったい・・・』

ジャスティスはそう言うのとベルトを外した。

「大丈夫ですか武さん！」

「大丈夫だけどお前の友達は？」

「アパートがすぐ近くなので、近所の人に送ってもらっておきました。」

「そうか・・・しかし妙だな。」

「何がですか？」

武は何かがおかしいと感じているようだ。

「あいつのベルトは俺やジェネシスのベルトとは明らかに違うんだが・・・」

「まあいいじゃないですか！相手も逃げて行っただし！」

「それにあの爆撃は一体・・・」

「それは確かにそうですね・・・まあ、帰りましょうか！」

「ああ、そうだな。」

そう言うと2人はバイクにまたがり武の家へと向かっていったのであった。

く裏通り

20代後半ぐらいの銀髪の男性は20名ぐらいの不良たちに囲まれていた。

「おい兄ちゃん金物物出せよコラア!？」

リーダーのような男が男性を脅す。だが、

「我らには金は腐るほどあるがお前らに渡すわけにはいかないんだな。」

「じゃあ命出せよオラア!」

怒号とともに不良たちが鉄パイプやらバットやらで襲いかかった。

「君らがな。」

男性はそう言うと金色の細長い『ある物』のボタンをおした。すると、

【フットボールフィッシュ】

電子音声が流れ男性は金色の細内外『ある物』をドライバーに挿入

した。

すると、チヨウチンアンコウの怪物に変身し男たちを返り討ちにした。

『これは『ガイアメモリ』といってな、お前らごときに命を取られることはまずないように作られているんだよ。』

そう言う最後の一人の首を折って投げ捨て、変身を解除した。

「ハッハハハハハハハハハ！」

T o b e c o n t i n u e d . . .

第4話 RI・TINOSA（後書き）

完全オリジナルといった私ですが、すみません。wのガイアメモリを入れちゃいました。といっても世界観の共有ということにしておけばいいじゃないですかね？

次のあとがきからはデリライトのように登場人物のおしゃべりを入れていきたいと思います！
それじゃまた！

ジェネシスドライバー説明とジェネシス図鑑？（前書き）

ジェネシスドライバーの説明とジェネシスの図鑑です！

ジェネシス図鑑は4話ごとに更新していきますのでお楽しみください！

ジェネシスドライバー説明とジェネシス図鑑？

・ジェネシスドライバー

ジェネシスが装着するベルト。ジャスティスドライバーと違うところはカラーリング（各ジェネシスによって異なる。）、チェックメイトボタンの有無、適応石の代わりにジェネシスのモチーフとなる物のデータを石化した鉱物というものなど、見た目にはかなり差がある。

メイキングの超瞬間転送システムにより使用者の意思で転送、装着され、「変身」の音声コードで作動する。ベルトが砕けても使用者に影響はないが、長期の使用（5〜6年）をするとベルトが砕けると使用者は爆死する。（メイキングは改良に努めており、原因は不明。）

また、使用しているうちに殺人衝動の増加や恐怖、罪を感じなくなるという副作用がある。例としてテッポウオジェネシスに変身した男子は当初はフットボールフィッシュドールパントにおびえていたが、使用すると、なれなれしく会話をしていた。

・ジェネシス図鑑

NO1 バタフライジャスティス

東大の試験管の男が変身した姿で蝶の特質をもつジェネシス。使用期間は1カ月程度と思われ、灯を殺害しようとした。飛行することが可能で、扇形の剣を武器とする。本編では使用しなかったが、空中を飛行して時々扇形の剣で斬り裂きまた上空へと飛行するヒットアンドウェイ戦法が可能。

NO2 テッポウオジェネシス

高校生ぐらいの男子が変身した姿でテツポウウオの特質をもつジエネシス。使用期間は2日で、自分の誘いを断った女子を殺害しようとした。（おそらく灯をナンパする前にも1、2人は殺害している様子。）武器は腰に装着されているテツポウウオ型の銃であり、高圧水流を発射する。本編では語られなかったが、高圧水流を発射するには10秒のインターバルが必要。

ジェネシスドライバー説明とジェネシス図鑑？（後書き）

灯 「武さんこれ見てください！よくまとめてあるじゃないですか！」

武 「ほう、すごいな。」

灯 「でしょ？もっと褒めてください！」

武 「はあ？お前が書いたのか？違うな。これを書いたのはキーシヨットだよ。」

灯 「設定では私なんです〜！」

武 「それではみなさん次回までさようなら〜（灯を無視しながら）」

第5話 TOUBEE（前書き）

これまでの仮面ライダージャスティスは・・・

「あ、これですか？これは今さっき完成した、簡単にいえばジェネシス図鑑です！」

「お、君かわいーね！どう？俺と遊びにいかね？」

『はあ、あんまり武器は使いたくねえんだけどな。』

『ガイアライダースラッシュ。』

『お前ごときが知る必要はない。』

【フットボールフィッシュ】

「ハッハハハハハハハハ！」

第5話 T O U B E E

とあるビル

「課長、課長！」

「ん？なんだね？」

「社長が呼びです。」

「社長が？」

社長秘書が課長を呼びに来たのであった。しぶしぶ秘書についていき課長は社長室へと来た。

ガチャ

「お呼びでしょうか社長？」

「ああ、来たか。まあ掛けたまえ。」

「はあ・・・」

なぜ呼ばれたのかが見当もつかない。何だろうと考えていると衝撃的な言葉が出てきた。

「今日限りで君は来なくていいよ。」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！どうしてですか？」

「まさか君、セクハラの件は私の耳に入っていないとも思っていたのかね？」

課長はハツとした。他言無用だときつく言っておいたのにだれかが告げ口したに違いない。茫然として荷物をまとめているときにそばを通った女性社員が呟いた。

「お疲れ様」

課長はブチぎれてある言葉を叫んだのであった。

く武の家

武はネットサーフィンを満喫し、灯はジェネシス図鑑をいじっていた。

「ふう、そろそろ風呂にでも入ろうかな・・・」

なにげにそう呟くと灯は風呂場へと歩き出した。一日の疲れを癒すにはやっぱり風呂が一番だな！そう思った時、

「今日はお前働いていないだろ。」

と、武に図星を突かれてしまふのである。

「なんで私の心が読めるんですか！」

風呂場からそう言うと、衣服を脱いだ。

「はあゝいい湯だな」

おっさんくさい事を言いながら灯は湯船につかっていた。すると、なんだか赤いものがお湯に溶けていた。

「なんだろこれ・・・」

「すごいな・・・」

「は？」

声をしたほうへ振り向くと大体20歳くらいの男性が横で灯を見ていた。・・・鼻血をたらしながら。

「キャアア――――――――――」

灯は悲鳴を上げた。すると、武が一目散に風呂場へ飛んできた。

「灯、どうした!？」

「武さん！お風呂に変な人が！」

灯は半泣きになりながら武に抱きついた。

「変な人だと？」

眉を吊り上げながら灯の指さすほうへと視線を向ける。そこにはまだ男性が灯の裸をじろじろと見ていた。

「とうべええええええええええ！」

武は殺気を膨らませたかと思いきや、素早き手つきでシャンプーの容器を男性の顔面へと投げつける。

とうべえと呼ばれた男性は、よける暇もなく顔面にシャンプーの容器がクリティカルヒットした。

「痛いな武！」

顔をさすりながらとうべえは文句を言う。

「なんでお前はいつも人の顔面に物を投げるんだよ!？」

「逆に聞くぞこの馬鹿！なんでお前はいつも帰ってくるとき俺に声をかけないんだ！？」

「なんでだろね？」

その答えにキレた武はジャスティスドライバーを装着する。

「ま、待つてください武さん！変身はだめですよ！」

「ま、そうだな・・・」

武の応接室

「こいつは尾田おだ 藤兵衛だ。とつべえ 簡単に言うとな俺の相棒だな。」

「よろしくな！」

鼻にティッシュを詰めて灯に挨拶する。

「おい武。いつこない女ゲットしたんだよ？」

「どこにいい女がいるんだ？」

その言葉に灯はイラッとしたがスルーした。

「いい女だろこれは！胸もお尻もなかなか」

言い終わる前に武の裏拳が籐兵衛の顔面に炸裂した。

「で、こいつはただの女好きだ。前までは仕事で外国に行ってたけどな。」

「ふーん・・・」

灯は籐兵衛に裸を見られた事が未だに恥ずかしかった。もちろん武にも見られていたのだが。

「で、こいつが俺の助手の水面 灯だ。まだこれといった活躍がないけどな。」

「失礼な！図鑑作っただじゃないですか！」

武は無視して続けた。

「で、籐兵衛。完成したのか？」

「ああ、もちろんだ。今車庫に入れてある。」

「そうか・・・」

何の話か分からない灯が割って入る。

「あの、何の話をしてるんですか？」

「俺が外国で作ったバイクだよ。」

「バイク？」

「見せてあげるから来てごらん。武も来いよ！」

武はやつとできたかという表情、灯はわくわくしながら地下の車庫へと向かっていった。

く 武の車庫

「すごいな・・・」

「すごーい!!」

武と灯りは驚いた。車庫には銀色のバイクが一台置かれていたのであつただが・・・

「だけど地味だな。」

「失礼だな！確かに見た目は地味かもしれないけど性能がすごいんだぞ！」

「どんな性能なんですか？」

「このバイクの性能は、絶対に壊れないことだ！」

「マジか！？」「

二人は同時に驚いた。

「ああ。ゾウ百頭分のおもりを百回落としても、爆弾で爆発させても傷一つ付かなかったぞ。」

「すごい」

武が褒める前にその声は警報によってかき消された。

「へえ、俺の探知警報器まだ動いてるんだ！なんか感動するな！」

「うるさい。いくぞ灯、籐兵衛！」

そう言うのと籐兵衛は自分のバイクに、武と灯は新バイクに乗って車庫から出た。

とあるビル

ビルのガラスはほとんど割られ、ビル内の人々はほとんど倒れていた。

「これはひどいな・・・」

武がそう言っでビルの中に入ろうとしたとき、入口から女性が飛ん

できて武とぶつかった。

「おい、大丈夫か!？」

「痛い・・・」

飛んできた女性が腹を抑えながら気を失った。すると、ビルの壁を突き破って怪人が出てきた。

『なんだ、お前らは？このビルの人間じゃないな・・・』

「灯、あいつはなんだ？」

「待ってください・・・出ました！あいつはボアジェネシスです！」

「すげえなその機械。」

籐兵衛は感心した。

「そんなこと言ってる場合かよ。灯、籐兵衛下がってろ。」

そう言うのと武にジャスティスドライバーが装着され、手をクロスさせた。

「変身。」

武がそう言うのとオレンジと黒の光が武に巻きつき仮面ライダージャスティスに変身した。

『お前もジェネシスカ・・・』

『いや、俺は仮面ライダーだ。』

そう言うとき、ジャスティスはジャスティスブレードを出現させてボアジェネシスに斬りかかった。

スパアアアン！スパアアアアン！

ジャスティスは斬りつけた後、腹を蹴り飛ばし、ボアジェネシスは壁に激突した。

『痛いな。今度はこっちの番だ。』

そう言うとき、ボアジェネシスはイノシシの頭を模した拳を構えた。

シュツシュツドガツ！

ボアジェネシスは連続パンチでジェネシスを攻め立てる。

『チツめんどくせえな・・・』

そういつとき、ジャスティスドライバーから適応石を取り出そうとしたとき、何者かに蹴り飛ばされた。

『またお前か！』

蹴り飛ばしたものはチョウチンアンコウドーパントだった。

『こっちのセリフだ。』

そう言うとき、チョウチンアンコウドーパントは体を発光させながらジ

ヤステイスに蹴りを決めようとしながら後退させる。

『チャンス!』

ボアジェネシスは、チヨウチンアンコウドーパントと戦っているジヤステイスの背中にストレートパンチを決めてジヤステイスを吹っ飛ばした。

『よっしやああ!』

『二対一はさすがにきついな・・・』

『終わりだ、仮面ライダー。』

チヨウチンアンコウドーパントは飛び蹴りを放った。

『くそ。』

『武さん!』

『武!』

誰もが終わりかと思ったが、チヨウチンアンコウドーパントにミサイルが直撃し吹っ飛んだ。

『またか・・・なんだ、お前は?』

チヨウチンアンコウドーパンはビルの屋上を見上げた。すると、人影が飛び降りてきて着地した。どうやら人ではなくジェネシスのようだ。

『うるさいぞお前。』

そう文句を言った者は手にロケットランチャーらしき物を持っていた。

『俺さっさと終わらせる派なんでね。』

『何だと？』

謎のジェネシスはベルトのチェックメイトボタンを押した。

【CHECK&charge】

電子音声が響き渡ると、空中にロケットランチャーらしきものが無数に出現し、チョウチンアンコウドーパントを取り囲んだ。

『なんだ、これは！？』

『知る必要はない。』

そういうと、もう一度チェックメイトボタンを押した。

【goodby】

『ウェポンズバーストゾーン。』

そう呟くと、ロケットランチャーらしきものが一斉に発射され、大爆発した。

『ぐああああああ!』

チヨウチンアンコウドーパントはそこから消えていた。

『チクシヨ―何なんだよ!?!』

ボアジェネシスは逃げて行った。謎のジェネシスは追う様子はなかった。

『お前は何者だ?!』

ジャステイスはベルトをはずしながら問いかけた。

『俺の名はウエポン。そうだな、お前がさっき言ってたっけ。俺は仮面ライダーウエポンだ。』

「「「!?!」」」

武、灯、籐兵衛は声も出なかった。

To be continued . . .

第5話 TOUBEE（後書き）

武 「おいおい、今回登場人物多すぎだろ・・・」

灯 「いいじゃないですか、にぎやかで！」

籐兵衛 「ああ、灯ちゃんの裸も見れたしね」

ドガツバキツ（灯が籐兵衛を殴る音）

籐兵衛 「すいませんでした・・・。」

武 「というか俺以外にもライダーがいたとはな・・・驚いたよ。」

灯 「あのライダーの詳細は次回で！」

3人 「また次回をお楽しみにー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0306y/>

仮面ライダージャスティス

2011年11月21日11時38分発行